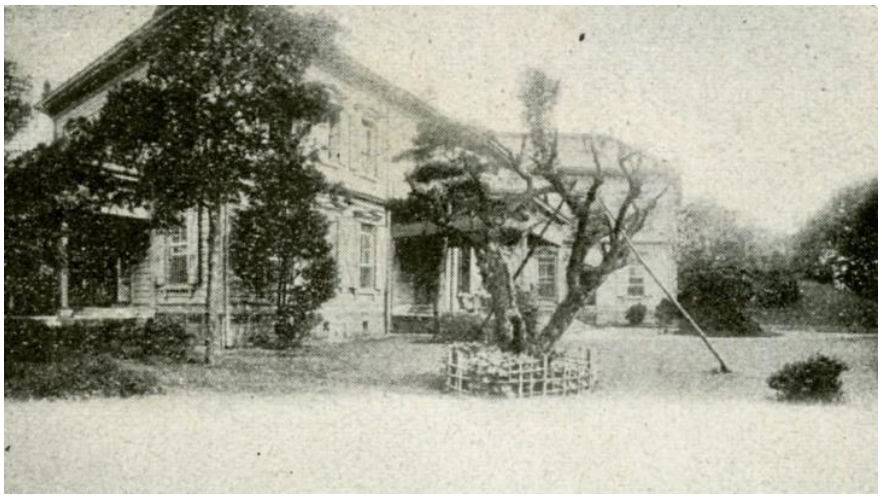
●「木原会」と「大森丘の会」

馬込文士村に文士が集まる少し前、山王に所在した望翠楼ホテルで展覧会が開かれていました。この展覧会は「木原会」といい、大正５（1916）年５月を第１回目として同８年まで４回開催したとされます。出品者は馬込や山王・新井宿に在住していた画家たちに限られ、小林古径、白瀧幾之助、川端龍子、鶴田吾郎、真野紀太郎、渡邊（亀高）文子、長谷川潔などの作品が展示されました。

「木原会」の会場となった望翠楼ホテルは、大正元年に実業家で衆議院議員の若尾幾太郎によって開業されました。洋館2階建て、客室 20 室、定員 40 名を収容し、各部屋に浴室やトイレを完備していました。洋式の食事を提供し、100 名が入る食堂があったとされます。高台に位置し大森一帯と東京湾を一望できた近代的なホテルは、海外からの宿泊客も多かったようです。若尾は、これからの社会を動かすのは文化だという考えの下、文化人が集いやすいホテルをつくったとされますが、「木原会」が開催されたことによって、その目的は達成できたといえます。

大正７年頃、「木原会」のあとを受け継ぐ形で「大森丘の会」が発足します。「木原会」に参加していた画家に加え、片山広子、日夏耿之介といった作家たちが加わり交流を深めました。大正時代の早い時期に画家や作家たちの交流があったことで文化的な環境が生まれ、後に文士たちが集まる素地ができあがりました。



望翠楼ホテル（『入新井町誌』昭和2年より）